

満州に届いた慰問文¹⁾

伊藤啓祐²⁾

Comfortable letters received in Mansyu

Keisuke ITOH

Key words: 慰問文、戦時教育、満州

1 はじめに

青森県立郷土館では、近代史に関する調査研究を開館当初より継続的に行っている。2014年、今別町在住の小倉セツ氏から満州に出征していたY氏が所蔵していた資料が多数青森県立郷土館に寄贈された。内容は、書籍、アルバム、書簡、賞状、軍服、勲章などである。Y氏は大正3年(1914)青森県東津軽郡一本木村(現:今別町)に生まれた。日記とハガキの宛先から昭和11~13年(1936~1938)まで軍曹として満州の富拉爾基(フラルキ)で軍隊生活を送っていた事が確認できた。戦後は青森に帰り、天寿を全うした。Y氏は内地から送られた書簡を大切に管理しており、その内容と人柄を窺い知ることができる。中には女性からの手紙をひとまとめにし、「満州に咲く花」と題名を付けて便箋を冊子にまとめているものもあった。また、寄贈されたY氏のアルバムの添書から非常にユーモアがある人物であることも分かった(図1)。本論は当時東京に住んでいた小学生Kさんとその弟のH君からY氏に送られた慰問文から、子供と兵士との交流について考察する。尚、本文中の人名は個人情報に辺り、Y、K、Hとした。以下敬称略とする。また、手紙の本文の旧字は読みやすくするために新字に改め、句点を付け加えているが、送り仮名と誤字はそのまま掲載した。

青森県立郷土館に資料を寄贈いただき、また、当時の情報等についてご教示頂いた小倉セツ氏、当時の状況等についてご教示頂いた細川ユキ氏に心から感謝する。

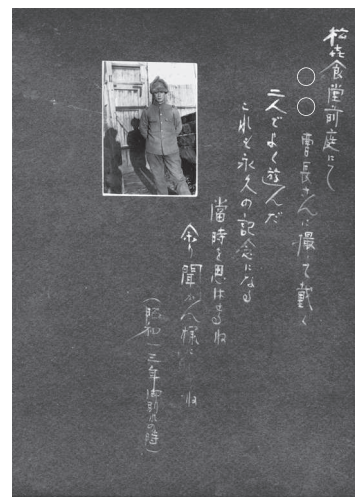


図1. Yのアルバムより『松林食堂前庭にて 〇〇軍曹さんに撮って戴く 二人でよく遊んだ これも永久の記念になる 當時を思はせるね 余り聞かん様にしてね (昭和十三年御別れの時)』

2 子供からの慰問文

戦地の兵隊に向けての慰問文は、慰問袋と共に日露戦争から送られるようになった。新潟県では昭和6年(1931)に満州事変に関する論文または感想文を県下小中学校から募集をしており⁽⁸⁾、昭和18年(1943)の記録によると『毎月大詔奉戴日には全團員慰問文を発送す。各班長は班員より集め内容を閲讀し分團長は分團指導者に提出。指導者は検閲の上八日に投函す。十七年九月より十八年五月迄の統計 少年團一慰問文 五, 六二〇通 女子青年團一同 一, 三三三通 郷土出身外への慰問文は年三回とす。』とある。慰問文は郷土から出征した兵士に送られるのが主だが、面識のない郷土出身者以外の兵隊に送られるものもあった⁽⁹⁾。また、奈良県では『毎月一回、八日の大詔奉戴日を中心として、前線の將士に慰問文を書かせてゐる。』⁽⁶⁾とあり、各地の子供達は学校や所属する少年団や青年団の指導に従い、月に1度の頻度で慰問文を書いていた。青森県での頻度は不明であるが大野村立安田小学校(現:青森市、1953年廃校)では『慰問文は學校として向ふにやるのは勿論であります、更に各團體が慰問袋をこしらつて送る場合も大抵は學校の方から慰問文を差上げて、これに加えて向ふに送るやうにして居ります』⁽⁷⁾と、学校として慰問文に取り組んでいた。Kが住んでいた東京でも修身の授業で慰問文を取り上げている⁽⁵⁾。

当時の子供達は、学校で毎月必ず書かせられると、何を書けばいいのかわからなくなったようである⁽⁶⁾。また、子供達は学校の指導で書くように言われて書くので、次第に生徒から自発性が損なわれ始める。そのため、平内町立松野木小学校(1957年廃校)では生徒1人づつに葉書を渡して書かせるなど指導の工夫をしていた。結果として、個人宛に兵士から学校に手紙が来るようになり、子供達は自分の小遣いを使ってまで戦地に慰問文を送るようになった⁽⁷⁾。以上のことから、おそらくKやHもこのような経緯でYに慰問文を送っていたと考えられる。

また、一般的に紹介される慰問文では兵士を激励する内容、戦死を慫慂する内容が多いように思われるが、武田一郎(1943)によると、教員は慰問文に書く内容として次の四点項目を上げ、指導するようにしている。『1 私達が

1) 青森県の近代史に関する調査研究(1)

2) 青森県立郷土館 学芸主査 (〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

毎日生活していることを知らせてあげること。』『2 自分たちの生活してゐる町や村の様子を知らせること。』『3 自分の體の様子や、運動のやうすについて知らせること。』『4 その他、自分が家のことに御手傳したこと等を知らせること。』⁽⁶⁾今回紹介するKやHの資料についても、多くはこの4点について書かれている。

実際、戦地にいる兵士にとっては子供達からの激励文よりも最近の郷土の様子や、無邪気な子供が一生懸命書いた手紙が喜ばれた^{(4)・(11)}。子供達からの慰問文が兵士達の精神的援護の一躍を担っていた。

3 慰問文の実例

寄贈資料のYの日記には昭和11年（1936）1月1日から6月8日まで記述があり、その日の郵便の発信受信も記録されていた。寄贈された資料には無いが、昭和11年1月25日（同日返信）、2月9日（5月21日に返信）、5月30日の3回、満州にいたYにKから手紙が来ている。以下に紹介する慰問文はKと彼女の弟のHからのものであり、特別明記していないものは全てKからである。日付は手紙が出された消印であり、綴られた便箋については内容から筆者が前後関係を推測して並べた。宛名は全てYの名前が書いている個人宛の手紙である。なお、Yには他に2名の女子から慰問の便箋があるが、まとまって保管しているのはKとHのみである。

①葉書 昭和11年10月2日 宛先：満州国濱洲線富拉爾基立川部隊

『長々ご無沙汰致しました。

兵隊さん此頃は朝夕大いへん涼しくなりました。兵隊さんの方はさぞ御寒いこととせう。別に御変はございませんか。こちらでは私も弟も毎日元気で学校へかよって居ります。今私たちは秋の運動会のれんしゅう中です。日のきまり次第おしらせしますから、たのしみにおまちして下さい。

兵隊さん御体を大切にして下さい。

さようなら』

②葉書 昭和11年11月2日 宛先：同上

『此の頃は太へんおさむくなりました。兵隊さんにはおかりもないとのこと安心いたしました。十五日の運動会には太へんよいお天気です、私が二等で弟が一等でしたから弟がいばって居ります。くやしいから今度は勉強で負かしてやろうと思って、毎日勉強しております。兵隊さんも御体を大切に御国のためにつくして下さい。

さようなら』

③葉書 昭和11年12月7日 宛先：満州国龍江省富拉爾基立川部隊

『此の間のしらかばの細工物をありがたうございました。さっそくあけて見ますと、しらかばの細工物なので家中の者は皆大喜びです。私もお話には先生から聞いて居りましたが、はじめて万里の長城を見せていただきました。明日学校へ持って行って先生やお友達にも見せて上げやうと思ひます。私もなお一っそう勉強して、ゆうとうをとります。兵隊さんも御国のためにつくして下さい。では御身大切にして下さい。

さようなら』

④葉書 昭和11年12月7日（Hより）宛先：同上 （図2）

『へいたいさんしらかばざいくをおくってありがとうございます。うちぢうの人人は皆大よろこびです。へいたいさんもみ国にのたためにてきをみなごろしにして下さい。ほくも学校でいっしょうけんめいにべんきやうしていますから、へいたいさんもみ国のためにつくして下さい。ほくしべんきやうしてゆうとうをとります。へいたいさんおからだをたいせつに。ではさようなら』

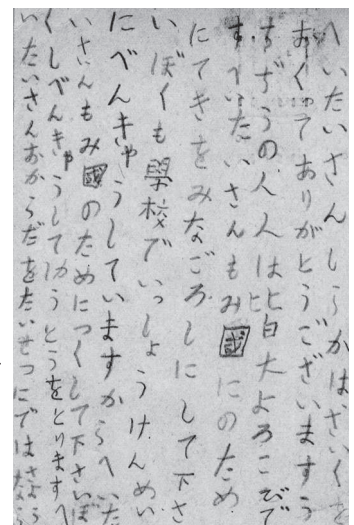


図2. Hの慰問文
(昭和11年12月7日)

⑤葉書 昭和11年12月22日 宛先：同上 （図3）

『此の間は大へんお寒むくなりました。兵隊さんの所も寒むいでせう。東京も初雪がふりました。お正月がくるので道行く人も皆いそがしそうに歩いています。私たちも廿五日からお休みです。弟も妹も早くお正月が来ればいいなと言って居ります。つまらない物ですが弟とおこづかいでかっておくりました。へいたいさんはふとっているか、やせているかわからないけれどもお母さんにしゃつをつくってもらいましたからおうけとり下さい。御体を御大切に。

さようなら』

⑥年賀状 昭和12年1月1日 宛先：同上（図4）

⑦年賀状 昭和12年1月1日 宛先：同上（Hより）（図5）

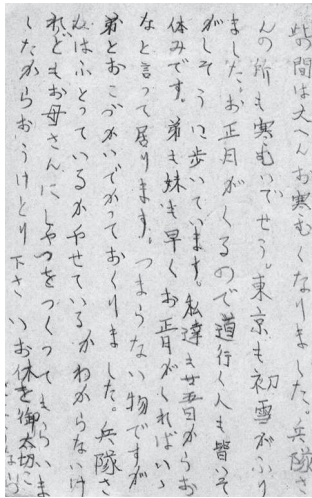


図3. Kの慰問文
(昭和11年12月22日)



図4. Kの年賀状
(昭和12年元日)



図5. Hの年賀状
(昭和12年元日)

⑧葉書 昭和12年2月26日 宛先：満州国濱洲線富拉爾基立川部隊

『ごぶさたいたしました。兵隊さんには其の後おかわりございませんか。私の方でも家中皆じょうぶです。私も弟も三学期のしけんで一生けんめいです。わたしが十二で弟が十で妹も七つで四月から学校へ行くのです。今年の冬は暖かですから桜の花も早くひらくでせうと思ひます。兵隊さん私たちの写真もおくりますから兵隊さんのもの早くおくって下さい。まっています。弟もよろしく申しました。
さようなら』

⑨葉書 昭和12年3月23日

『たいへん暖になって桜咲く頃になりました。兵隊さんにはお褒めございませんか。私たちもおかげさまで皆元気で居ります。今年も二人とも優等生になりましたから、お喜び下さい。その中にしゃしんを送ります。この後も勉強いたします。御身大切に。
さようなら』

⑩葉書 昭和12年5月20日 宛先：同上

『初夏候となりました。兵隊さんにはその後おかわりもございませんか。私たちも元気で勉強しています。この間鎌倉にいったて来ました。八幡様や頼朝の墓や大仏様を見てきました。兵隊さんも小学生の時に小出でになったことありますか。そろそろ兵隊さんの方はなつになりますからにぎやかになることとせう。気候不順ですからおからだを大切にして下さい。私も弟も一生けんめいで勉強します。
さようなら』

⑪葉書 昭和12年6月6日 宛先：同上

『兵隊さんお手紙ありがとうございました。さっそくはいけんしますと、中から兵隊さんの御写真が出て来ましたので、家中大喜びで見ました。ほんとうに、立派なえらいへいたいさんだと、父母が申して居りました。私は学校へもって行ってせんせいやお友達に見せてしましました。弟も家の兵隊さんだといっていばって居ります。ちかいうちに私たちの写真をおくります。
さようなら』

⑫便箋 消印不明 宛先不明

『御無沙汰いたしました。
兵隊さん、私のと弟の写真がやうやく出来ましたから今日お送りいたします。兵隊さんがお笑になるやうなぶかっかな顔です。又兵隊さんのお写真を学校の先生やお友達などに見せては自漫をしています。家においでになりました

お客様にもお目に掛けて居ます。だんだん暑くなって来ました。こちらは入梅で毎日むし暑くて、夜は夜店へ行くと金魚屋が出ていていかにもいろいろな金魚がいて初夏らしいかんじがします。私達も元気で勉強しています。兵隊さんもおからだを大切にして下さい。 さようなら

K

兵隊さんへ』

⑬葉書 昭和12年7月26日 宛先：満州国興安北省海拉爾早淵部隊立川部隊

『大へん御暑くなりました。

兵隊さんにはおかわりもございませんか。私のお友達のお父さんやお兄さんが兵隊に出られましたので兵隊さんの方も大へんでせうと家中心配して居ります。私たちは皆元気で勉強して居ります。二十一日から夏休みで毎朝ラジオ体操に行つて居ります。兵隊さんの方はずいぶん御暑いでせうから御体を大切にして下さい。

さようなら』

⑭葉書 昭和12年8月2日 宛先：同上

『毎日お暑ございます。兵隊さんにはおかわりございませんか。今内地では千人むすびの玉よけを方々でこしらへて居りますから、私も兵隊さんののにこしらへて本日御送申しましたから、お受けとり下さい。内地は少しも雨が降らないで、毎日お暑ございます。兵隊さんの方もづいぶんお暑こととせう。

御身御大切にして下さい。

さようなら』

⑮葉書 昭和12年10月20日 宛先：同上

『絵葉書ありがたうございました。弟妹とありがたく拝見しました。此の間お父さんとえいぐわニュースを見ましたら、満州の兵隊さんが雨の中でにこにこ笑つて居ました。弟が家の兵隊さんもああやつて居るのかねと言つて居ました。去る十五日に秋季運動会で私と弟は一等で妹は二等でいばつて居ります。だんだん寒くなりますから兵隊さんもお体を大切にして下さい。

さようなら』

⑯葉書 昭和12年10月31日 宛先：同上（Hより）

『兵隊さん度々おめづらしいゑはがきをおほくり下さいまして、有難うご座りました。僕はうれしくてうれしくてたまりません。学校へ持つていって先生におめにかかけたりお友だちにみせてあげたりして喜こんでいます。兵隊さんの方はずいぶんさむいでしゃうから、からだをだいじにしてみ国のためにつくして下さい。僕も一生けんめいに勉強します。

さようなら』

⑰葉書 昭和12年11月24日 宛先：同上

『兵隊さん此の頃は大変お寒むくなりました。兵隊さんの方はどんなにかお寒むいこととせうと思ひます。私は毎日学校へいって先生のおしへをよくまもりよく勉強して居ります。又朝礼のとき先生方に北支のことをお話ししていただきます。家へかへつてもお父さんに新聞紙上のことを聞かせていただいては兵隊さんの方のめざましいはたらきを思ひ浮べて居ります。私達も一生懸命神様に兵隊さん方の武運長久をお祈りして居ります。どうぞこれからはだんだんさむくなりますから、お体を大切にしていわるい敵兵を思ふぞんぶんやつつけて御国のためにつくして下さい。

さやうなら』

⑱葉書 昭和12年12月26日 宛先：同上

『此の頃は大変お寒むくなりましたが兵隊さんにはお変ございませんか。私も兵隊さんが戦地においでになるやうな気持ちで勉強いたしましたので、よいせいせきがいただけましたから御安心下さい。内地はお正月の支度で松や竹を立ててお正月を待つて居ります。道行く人もいかに暮らしつ歩き方をしてとほります。日にまし寒氣きびしくなりますから、兵隊さん御体を大切にして下さい。

さようなら』

⑲年賀状 昭和13年1月1日 宛先：同上（図6）

②⑩年賀状 昭和13年1月1日 宛先：同上 (Hより) (図7)

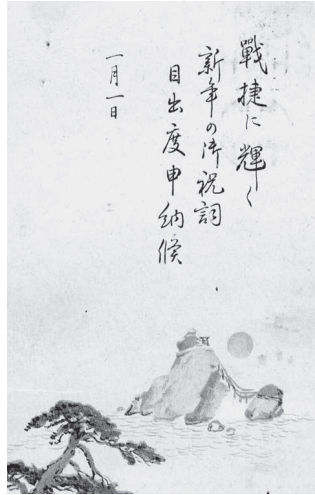


図6. Kの年賀状
(昭和13年元旦)



図7. Hの年賀状
(昭和13年元旦)

②⑪葉書 昭和13年2月12日 宛先：満州国海拉爾早測部隊賀谷隊

『拝啓度々お便り下さいまして、ありがたう御座居ました。此の寒さにも兵隊さんはお元気との事、御喜び申し上げます。又、御書初をありがたうございました。父が大変よろこんで（がく）にすると申して大事にして居ります。私もあまり嬉しいので学校へ持って行き、先生やお友達に見せました。三学期の終で弟と二人で毎日勉強して居ります。さやうなら』

②⑫葉書 昭和13年3月9日 宛先：同上

『兵隊さん御無砂汰致しました。此の頃はだんだん暖くなりましたが、其の後もお変もございませんか。兵隊さんが一生懸命に御国のためにつくして下さいるので私達は安心して勉強して居ります。此の間も学校の校長先生から兵隊方のお話を聞かせていただいて私達もなまけてはいられないと思って居ります。こちらでは桜の蕾もふくらんで来ました。又其の中におたよりいたします。兵隊さんお体大切にして下さい。さやうなら』

②⑬葉書 昭和13年3月28日 宛先：満州国興安北省海拉爾岡村部隊本部

『お手紙ありがたうございました。兵隊さんにはげまされて私も弟もおかげ様で優等生になる事が出来ましたから、御喜び下さい。此の頃はだいぶ暖くなりましたが此の冬は寒むかったため、桜の花もおくれて四月中頃でせうと思ひます。又、新学期から一層勉強するつもりで居ります。此の後ともにご鞭達くだされますやう御願申します。兵隊さんお体大切にして下さい。さやうなら』

②⑭便箋 消印不明 宛先不明 手紙

『本日はお手紙有難たう御座居ました。先日お手紙差上げましたがお届け致しませんでした。私もお蔭様で尋常六年を本年優等で卒業致しました。今は女学校へ入学し志願者が六、七百人居りましたが、其の中百五十人きり試験の結果取りませんでした。私も試験が受って四月八日から女学校一年生になりました。満州はとても暖いさうですが東京も今は桜も散って藤の花がほころび初めて来ました。なほ今は靖国神社の大祭で護国の英霊の御遺族方が御参拝なされて居ります。私達も去る二十五日には英霊に対し心から感謝致し一分間の黙祷を捧げました。又昨日は飛行機が二百五十台も揃って飛んでずいぶん勇ましい事で御座居ました。兵隊さんの運動会も定めし元気一ぱいで勇ましい事と思ひます。Hも家の者も皆元気です。時節柄御身御大切になさる様お祈りします。さやうなら』

四月二十七日 夜
K
Y様』

5 考察

当時の慰問文について、子供と兵士の交流について考察する。慰問文⑤の内容から、YとKは面識がないことが分かる。しかし、残された慰問の葉書には全てYへの個人宛であることから、Kは始め学校の指導に基づいて兵隊さん宛の手紙を書き、それを受け取ったYが返信したことから文通が始まったと推測できる。また、KとYの文通はKが11～13才、Yが22～24才の時期でのやりとりである（⑧葉書）。慰問の内容は兵への激励ではなく、Kの身のまわりのことが書かれているが、Yのアルバム（図8）にある「コレデモ人ノ羨ム程ノ仲ヨ？」「兵隊サン元氣デネト 御便り見ル時ノ心ヨサ」とあり、Kの手紙を喜んでいたことが伺える。また、二人の関係が「羨ム程ノ中」とあるのでYのように子どもと個人的な文通をしていた兵士はそれ程多くはなかったのではないかと推測される。YはKと写真を送り合ったり（⑪葉書、⑫便箋）、しらかば細工（③葉書）や絵葉書（⑮葉書）を送って、心の交流をしていた。K一家もいつしか、Yを家族のように「家の兵隊さん」と呼ぶようになり（⑪葉書、⑮葉書）、その親近感が見てとれる。また、寄贈された葉書は全部で123通あるが、そのうちKとHの葉書は22通ある。その中で19通は、Kの葉書で最多であることから、やはりYにとっては特別な存在だったのでは無かろうか。

弟のHはKより2才年下なので、④の葉書を書いた時は9才であったと考えられる。男の子であるからか、学校の指導からか「てきをみなごろしにして下さい」、「み国のためにつくしてください」（④葉書）という文がある。一方、姉のKの手紙にはそのような内容は少なく、戦争の話を学校、父親から聞いた時に書いた「わるい敵兵を思ふぞんぶんにやつつけて御国のためにつくして下さい。」（⑮葉書）のみである。日米開戦前だったためか、一般的に紹介されるような激励の内容ではなく、本当に日々のことを書いている手紙が殆どである。決まり文句の「武運長久」を祈ることもこの葉書1回のみである。

Yから見ればKは若すぎる子供だが、「最上の慰問は若い娘の慰問文」⁽¹⁰⁾とあるように、この文通はYにとって非常に喜ばしいことであったと考えられる。「兵隊さんが笑になるようなぶかっかうな顔です」と書いた便箋と、その写真を大切にアルバムに収めていたことから、Kからの手紙は十分にYの慰問となっていた。

6 おわりに

今回の小倉セツ氏寄贈の資料により、戦地に送られた慰問文について知ることができた。これにより戦地に赴いた兵士の精神的援護の一端を垣間見ることが出来た。慰問文そのものについて、また満州での日常生活については調査中である。以後、戦地と内地の手紙のやりとりの研究を進め、当時の日常について研究を進めていきたい。

（参考文献）

- (1) 一ノ瀬俊也（2004）明治・大正・昭和 軍隊マニュアル 光文社新書：pp217
- (2) 一ノ瀬俊也（2009）皇軍兵士の日常生活 講談社現代新書：pp280
- (3) 一ノ瀬俊也（2010）故郷はなぜ兵士を殺したか 角川学芸出版：pp289
- (4) 川村みのる（1942）僕の見學記 帝国教育会出版部：pp149
- (5) 小林佐源治（1941）國民科修身授業細案 初等科二学年前期用 教育實際社：pp284
- (6) 武田一郎（1943）奈良女子高等學校師範學校附属國民學校國民教育研究會編纂 學修訓練の記録 中學年篇 明治図書：pp238
- (7) 東奥日報（1939）銃後青森縣を語る 東青號 月刊東奥臨時増刊：pp176
- (8) 新潟縣（1942）軍人援護誌 第一輯：pp282
- (9) 新潟縣佐渡郡金澤國民學校（1943）金澤少年團青年團女子青年團運営の實際：pp112
- (10) 平出英夫（1942）戦ひを身につけよ 一若き女性のために 朝日新聞社：pp164
- (11) 三浦忠三郎編（1939）興亜の協同體 鮮満北支を一巡して 大門印刷所：pp47

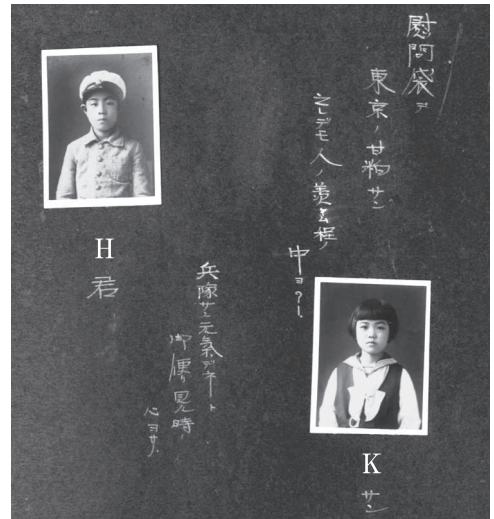


図8. Yのアルバムより KとYの写真『慰問袋デ東京ノ〇〇サン 之デモ人ノ羨ム程ノ中ヨ? 兵隊サン元氣デネト 御便り見ル時ノ心ヨサ』